

---

# 速度と速さが落ちる時

白代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

速度と速さが落ちる時

### 【Nコード】

N4020K

### 【作者名】

白代

### 【あらすじ】

人の体内には、速度が川のように流れている。

『センパイ』はそう言った。ながれも自分の速さを知りたくて、落ちた。速度を知りたかった人間を調べようと、無関係者が関係者になる。

## 0 / 落とした速度（前書き）

ものっそい暗い話だよ！

## 0 / 落とした速度

### 【じさつ雑談】

しかばね：うちの町でさ、自殺した奴がでたみたいで。軽く新聞に載ってたよ。

真弓：へえ。しかばねさんはどこに住んでる人だっけ？

しかばね：東京の田舎の方。まあ、池袋とかにすぐ行けるっちゃあ行けるけど。でさあ、その自殺者のことだけど。なんか、まだ若い女の子だったらしいね。ほんとなんというか馬鹿というか。変な遺書も残してたらしいし。

真弓：そうなんですか……ていうか、自殺志願者でもないのにこのチャットに居るわたしたちってwww

しかばね：いいんじゃない、まあ。

真弓：じゃあ、ちょっとそのことについて調べてみますね。落ちます。なんだか興味があるというか。

しかばね：なにに？

真弓：死んだ女の子に、ですかねえー。

### 【板日新聞】

東京都I区にて、灯川高等学校の女子生徒が自殺した。尚、女子生徒は自殺するような少女だとは一切語られず、朗らかな少女だったと証言される。本人が残した遺書だと思われるワープロ書きの本文には意味不明なことが残されてあった。学校側は女子生徒の死を酷く嘆いており、『教師などへの態度もよかった』『とても成績優秀な子だった』と語っている。

（以下略）

「ながれちゃんに、これを渡してくれ。あと、伝えてほしいことがあるんだ。絶対に忘れるなよ、これは、僕の速度に関わることなんだ。……ながれちゃんに、『僕は速度を計りました。速度研究部の活動頑張ってください』って。あと、『これが証拠です』って、この封筒を渡してくれ。いいか、中身は絶対見るなよ。中身を見ていいのは彼女だけだ。……ああ、それともうひとつ。これも絶対に言っしてほしい。いや、特に言っしてほしいかな、」

『きみは、速度を落とした』。

## 晴の海／大氣の流れ 1

八千代やちよながれ。

という少女を、かざみたいき風見 大氣が気にかけていたのは高校に入学した  
ての四月、クラスと班が一緒になってからで、また、ながれについ  
て『うわさ』がたっていたのも、その頃だった。うわさというのは  
勿論いいものではなく、『おかしい』とかそういう類のものだった。  
かといって彼女に友達がいなかったりいじめられているということ  
は全くなく、むしろ、女子とも男子とも仲が良さそうに接していた  
だが、そんな彼女の中にな何か『深いもの』があつたのかもしれない。  
い。

その『深いもの』というのは、黒かったり、もしくは『彼女では  
ない何か』だつたりするのもかもしれないが。

大氣は、彼女の全てを、まだ把握していれていなかった。

でも彼女と授業中少し話したりするだけで、俺ならもつというん  
なことを知っていける、俺は知りたい、そんな気分になっていたの  
だ。恋愛感情とか、そういうものではないと大氣は思う。

そして。

大氣は剣道部に入部したものの、9月、自宅の階段から落ちて（  
とても情けない話なのだが）、腕・手等を怪我してしまった。骨折  
とまではいかなかったものの医者からは『もう自由に剣道ができな  
いだろう』と宣告され、大氣は大好きだった剣道を止めざるを得な  
いことになってしまったのだ。でもまあ最近面倒だなあと感じてい  
たし、今となつてはもうそんなことふつきれ、退部し、よし自由だ  
と張り切っていたところ、同居する叔父と叔母からなんでもいいか  
らとりあえず他の部に入部しておくようにと言われたのだ。恐らく  
は、彼の内申などを気にしているのだろう。

仕方なく、大氣はどこかの部に入部しておくことにした。職員室

の棚から部活一覧表を見て、自由で部員数が少ない部活をピックアップしたところ、残ったのは『文芸部』と『オカルト研究部』と『速度研究部』だった。

文芸部には自分の苦手な同学年の女子（根暗で、だれとも話そうとしないようなタイプだ）が三名くらいいたし、オカルト研究部は何より一番怪しげで不安になるような部活だった。確かこの間は太った三年の男子が、『火の玉を作る』とか言って、怪しげな液体の入ったフラスコを持って『火の玉ができぞー！』と叫びながら、とりつかれたように廊下を走っていたっけ……思いだし、とりあえず文芸部とオカルト研究部はカットした。残っているのは、『速度研究部』。

部員の名前はのっていない。だが、部員数は載っている。部員数、一名。廃部スレスレだ。こんな部活があることすら知らなかった。いったい速度研究部とやらは何をしているのだろう。

とりあえず入部しようと思い、大気は入部届に必要事項をスラスラと書いて、顧問に提出した。部員に挨拶するのは後にしようと思ったのだ。

某年9月某日。

大気の手は、流れていた。

顧問に教えられた部室は、三階にあった。階段をあがり、トイレが近くにある一番奥の教室。この教室は使われていないものだ。顧問は言った。なんでも、最初は普通にクラス数が多かったために教室として使われていたが、クラス数が減るにつれ物置にされ、卒業した部員が率先して部室に生まれ変わらせたという。ちなみに、部

の設立者はその卒業した部員だという。今現在は大学生だろう。

大気はその部室前に来ていた。速度研究部の部員というのは把握していなかった。ましてや速度研究部という、名前を聞いても活動内容がわからないような部の存在すらも知らなかったわけだし。

明るいタイプの俺（自分で言ってしまう）には暗いタイプは釣り合わないと思っっている大気は、もし部員が暗い奴だったらどうしようと考えていた。でももう入部届を出してしまったし、部員の姿を見て「退部します」と部室をでしてしまうのもどうかと思っているので、余計に大気は悩んだ。困った。ドアノブを握ってみるものの、手汗で滑る。

俺の青春がかかっている。

外では楽しくしていたいから。

だから、暗くてはいけないのだ。俺の周りに暗いものがあつては、いけないのだ。

大気は思い切ってドアを開けた。

「……あれっ」

今までの葛藤は何だったのだろうか。部室内は閑散<sup>かんさん</sup>としている。背丈が高い本棚には本がびっしりうまっていて、それらの本の背表紙には『わかりやすい速度』『図解！速度のヒミツ』『速度がわかる！』など。長いテーブルにはポットがあり、傍らに置かれたティーカップには、それに不似合いな緑茶が注がれていて、まだ湯気がでていた。更に隣にはノートとペンケースが置いてあり、シャーペンが一つノートの上に置いてある。

明らか、人がここにいたのだ。

「失礼しまーす」部室に足を踏み出す。

目についたのは、ノートだった。

ノートの表紙には、

「夢日記……？」



悪いとはわかっていながらも気になってしまい、つつい中を見ようとしてしまう。

『夢日記』のタイトル文字は、随分と雑に筆ペンでかかれていた。自分も小学生の頃、日記をつけたが三日で終わったなあ、と大気は苦笑する。

夢日記のページを開こうとすると、鼻歌が聞こえてきた。誰か来た、と思い大気は焦る。夢日記はまだ手にしていた。鼻歌はどんどん近づいてくる。やたらとご機嫌な鼻歌だった。鼻歌が近づいてきて、そして、

ドアが、かちやり、と控えめな音をたてて開いた。  
入ってきた自分を見て、大気は声をあげる。

「やち、っ……」

「ぎゃあああああああなな何、なにになにながれのその夢ゆめゆゆ夢、」

焦りながら少女は大気に向かって飛ぶ。ジャンプした。膝より少し下の位置までのびる、学校の指定長さの黒いスカートがぶわりと舞い上がり、黒い蝶を連想させる。パンツみえるぞ、と忠告する間もあたえないままに、少女は大気にのしかかった。体重は感じられないと言っていいほど軽い。大気は倒れ、少女は大気の上におおいかぶさんようにのっていた。

ふくよかとは言いがたい二つのものが大気の胸にあたり、大気は生唾を飲む。少女はそんなことおかまいなしに大気が手にしていた夢日記を激しく大袈裟な身振りで奪いとり、もう一度大気に奪われないように抱くようにして、すくっと立ち上がった。

顔を真っ赤に染めて、大気を見下ろす。そして怪訝な声で、

「……見た？」

とだけ言う。

なんだかおかしくかんじて、大気は笑いながら言った。

「見てないよ」優しく笑う。「八千代」

この少女こそが、八千代ながれだった。

長くはないツインテールは、二本とも胸のあたりまでのびている。どことなく幼い子供を連想させるような髪型だった。スカートからのぞける脚や足首はとてほ細く、同様に腕もかなり細い。肌の色は白かったが、どことなく健康的に感じさせる。夢日記を大事そうに抱えて、ながれは椅子に座って落ち着こうと緑茶を口にした。大気も立ち上がり、勝手にながれの対面するような位置にある椅子に座り、ながれを見つめた。

「まさか、部員がおまえだったとはな。これから苦労しそうだぜ」正直、部員がながれで「超ラッキー！」とさえ思っていた。彼女の胸があたった時は「超超超ラッキー！」とも思っていた。

「で、どうしたの、急に。なんか機嫌よさそうだねえ」ながれはもう落ち着いていた。いつものように微笑みををこぼしながらふわふわと喋る。

部員がお前だったから機嫌がいいんだ、とは言えず、「ちょっとな」とごまかして再度口を開く。

「入部しにきた」

「ふーん、……………ふ、一《入部》ふふふ!? ぶふっ!」

「うわっ、吹き出すなよきたねえな!」

「……失礼、続けて」

「ああ。俺が足怪我したのは知ってるだろ? それで、この神たる俺がもう永遠にサッカーできないらしい。この俺がな。どう思う? これは、屈辱的だろ。この俺がサッカー部に君臨することはできなくなるタイミングで、サッカー部の部員たちはどれだけ嘆いたか」

「わーすごーい。で?」

「で、退部した。でも部活に入ったほうがいいっつーことになって、ここに」

「他をあたったほうがいいよお」呆れながらながれは言う。「だっ

て、うち、真剣に部活やってないもん。いつもわたしが一人でお茶飲んだり一人でオセロやったりしてるだけだもんっ。だから、風見みたいに『部活しようぜ!』って張り切りそうな人にはむいてないよお? 部活らしき部活をしたことは、あんまりやってないし。まあうちの部活のいいところがそこだけだね……お茶飲んだりお菓子食べたりできるから、いいんだけど」

「一人でオセロってどういうことだ。……そんなにお気楽なのかよ。だったら例えば、その日出た課題を部室でやるってのも可能だったりするか?」

「うん。ながれはそうしてるもの」

「俺、そういうことができる部活がいいなーって思ってたんだ」

「やだよ、風見がうちの部活に入るなんてさー。うるさくなるもん。どうせながれのこと、またいじめるでしょ」

「いじめないよ」

「そ、そう?」

「『いじめる』なんて簡単な言葉では表現できないくらい、いじめつくしてやるよ」

「Sだー!」

叫ぶながれを見て笑いながら、大気は食器棚からカップを出して、自分の緑茶を用意した。9月。8月が終わったばかりのこの時期なのに暖房がついていて、少しというかなり暑い気がしていた。今日は確かに気温が下がっていたが、暖房をつける程ではないだろう。ながれは寒がりなのだろうか。

緑茶をのみ、はぁーと息をはいてから大気は同じく緑茶を飲むながれを見た。

決して美少女というわけではない。容姿は普通だ。

でも、大気はそんなながれにもどこか可愛さがあると思っていた。

「とにかく」カップを置いて、ながれが言う。「入部はやめなよ」

「残念でした。もう入部届提出したぞ」

「はぁ!? なんて! いつ!」

「今日。正式に俺は部員だ。あー後ちなみになんで入部したかった  
いうと、楽そうだったから。それ以外に理由無し。部員がお前だっ  
て知ってれば入部しなかったけどな」

「退部しろ！」

「無理。ここ以外に楽そうな部ねえもん」

「もーいやあー」

嘆くながれを見ながら笑い、大気は緑茶を飲んで一息ついた。

そして口を開き、話題を切り出す。

「ここって何をする部活なんだ？ 活動日はいつだ？ 詳しく教え  
てくれよ、俺塾行ったり遊んだり忙しいんだから」

「んーと、活動日は毎日でー、じゃあ、ながれが休んだ日は無しに  
しよっか」

「なんだよそれ……」

ながれは笑って、部活の説明をしていく。

「この部活はね、速さ……『速度』を研究し、そして『速度を感じ  
る』部活。実際に速度を計ったりすることは多分無いけれど、そう、  
速度を『感じる』んだね、主に。」

ながれたちは、こうして毎日生きている。人間には同じ時間が対  
等に与えられ、そしてながれたちの体に速度は『流れている』んだ  
よ。血液と同じように。でも、もう卒業しちゃったけどこの部活に  
いた人に会いにいつて、速度について教えてくださいつて言っただ。  
そしたらね、『センパイ』は、時間は人間に公平だ。けども、  
速度は公平じゃない。人間は、自分の速度を計ったりすることはで  
きないけども、必ずしも人間に速さというものはある。生きている  
中で、その速度が遅い者、早い者、かなり遅い者、かなり早い者。  
そしてそして遅かったのに早くなる者……まちまちである、って。  
ながれは、お風呂に入っている時に考えてたんだよねー。多分その  
センパイの言うことって、速さって、人間の日常の速さのことじゃ

ないかなってね。センパイの通う大学の近くに行って、センパイにそれを話そうとした。ながれの考えたこととか。また、センパイの話をきけたらいいなって。

でも、センパイはいなかった。センパイの友達がながれに、センパイからお手紙だよって、お手紙を渡してくれた。大きい封筒に入ってたんだけどね。手紙には『速さを計りました。これが証拠です。ながれちゃん、速度研究部の活動、頑張ってください』。って。こう書いてあった。大きい封筒の中には、画面のプラスチックが割れたストップウォッチが入ってたんだけど……壊れてて、時間は表示されてなかった。

センパイのそれは、よく意味がわからなかった。だけど、ながれは、速度についてわかった気がするんだ。速度研究部の言う速度は、要するにそういうことなんだよ。あつ、ストップウォッチはハンガーにかかっているよー」

ハンガーにかかったストップウォッチの画面は、確かに割れていた。

なぜ割れているのかは、ながれにもわからないという。

「……で。風見が本当に入部したいなら、ながれの話を最後まで聞くことだね」

「話？ 話は今で終わりだろ」

「終わりじゃないよ」満足げにながれが言う。「まあ、全く関係の無い話だけど」

緑茶は冷めかけていた。

ながれは他の生徒よりとりわけ頭が良い。学校の勉強もできるはできるが、彼女のやっている勉強はそんな甘っちょろいものではない。時にはフランス語や、高校生が覚えなくてもいいような科学のこと、世界のこと、なんでも知っている。ながれの話をききにこようつこの部室に足を運んだ三年生が何人かいるほどだ。

「さて。今回は、『木の実で爆弾製造ができるか』についてお話ししましょう」

それをきいて、大気は溜息をつく。呆れた。本当に入部とは何も関係のない話だった。ただコイツが話ただけじゃないか、と思いながら緑茶を飲む。ながれは得意げだった。

「木の実で爆弾製造、ねえ。本当に関係ねえなあ」

「バッキンガムシャー北部のナツシユ村のとある学校の日誌を読むと、1917年の11月19日、このような記述がある。『トチの実を集め、弾薬用として提供したことに対し、火薬調達官から感謝状が届く』、と。まさか木の実の鉄砲だと思う？ まさか。トチの実はどう使われたのか。弾薬とどう結びつくのかねえ。

イギリス科学界発行の月刊誌の1987年2月号に掲載されているのは、トチの実の第一次世界大戦中、アセトンの製造に使われた、アセトンってのはね、煙のでない火薬のホルダイトの製造に使われるやつだよ。ホルダイトは線火薬65%、ニトログリセリン30%、ワセリン5%からなるんだね。アセトンでゼラチン状にして実際に使われる形に加工するんだ。アセトンは木の抽出で、」

「ちょっと待て」

「ん？」

「結局、八千代は何が言いたいんだ？」

大気の発言をきいた途端、ながれは豪快に笑い出す。腹をおさえて涙を目に浮かべながら、さもおかしそうに笑い転げた。大気が啞然としていると、「ごめんごめん」と涙を吹いて冷静になる。だがまだニヤケていた。

「部長、八千代ながれが言わせてもらう。きみ最高！ あはははは！」

「結論をききたいんだけど。それにしても何がおかしいんだか」

「ああ、結論ね」立ち上がり、本棚から何やら本を取り出しながれながれは言った。「木の実で爆弾がつくれる、木の実の成分から君でも簡単に爆弾を作れたら、どうする？」

「えっ？」

大気はしばらく考え込んだ。これは、入部試験とかそういうもの

だろうか。答えによって、ながれが自分を入部させるかどうか決めるのだろうか。「うーん」と唸りながら考え込んだあげく、何か聞いたように大気は笑顔になって、ながれに言った。

「学校を、破壊する！」

「入部してよし！」

どうやらながれはその答えを待っていたらしい。このように答えていなかったら、ながれは無理矢理にでも大気を退部させただろう。八千代のことだからこう答えればいいだろう、と大気は思ったのだ。

ながれは微笑んで、先程取り出した本を大気に差し出した。

もうすぐ、部活動中の生徒が帰宅する時間だ。それでも吹奏楽のトランペットの音がきこえてくる。

「なんだよ」

「これ、風見に貸すよ。割と新しい本だし、読みやすいと思うよ。

君はまあながれと比べたら馬鹿だけど、頭いいほうだからわかるんじゃないかな。この本に、今の話の答えや続きがのってる。興味があつたら、読んでみて」

と、無理矢理大気に本をおしつける。

本のタイトルは『超科学講座』。薄くも厚くもない厚さで、確かに新しいものだった。ただタイトルからして難しそうで不安だったが。

「今日の部活は終わり。また明日。本返すのは、いつでもよし」

帰りの用意をし終えて、ながれが言った。

「解散！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4020k/>

---

速度と速さが落ちる時

2010年10月27日21時37分発行